



# 合唱の祭典

42人の作曲家が自作を発表

'86 JAPAN CHORAL MUSIC FESTIVAL

7月9・10・11日 東京・パリオホール

主催・日本作曲家協議会 | 東京合唱協会 photo 竹原伸治

reporter 松下 耕



高嶋みどりさん



飯田三郎氏



岡本正美さん



伊藤翁介氏



桜井順氏



三枝成章氏



若松正司氏



三木稔氏



芥川也寸志氏



山本直純氏



山本純ノ介氏



田中利光氏



坪能克裕氏



菅野由弘氏



池辺晋一郎氏



松村禎三氏



西村朗氏



間宮芳生氏



平吉毅州氏



嵐野英彦氏



青島広志氏



新実徳英氏



毛利蔵人氏

曲と言えば「水のいのち」と「月光とビエロ」だったはず。そして二十歳代——私も含め、自分だけが青年だと思っている人達——が高校生の頃は「筑後川」「島よ」「ひとつの朝」「コタンの歌」etc、少しレパートリーが増えている筈です。そして今の高校生が歌っている曲は……「マザーグースの歌」「やさしい魚」「ひたすら道」「日曜日」「優しき歌」など、あげていけばきりがありません。それだけ曲が豊富になったと言ふことは、作曲家が、合唱というジャンルを見直し、そこに質の高い作品を送り込み、また、マスコミもそれらの作品をどんどん世に送り出してきたからと言えましょう。

さて、前おきが長くなりすぎましたが、コンサートの様子をお伝えすることにしましょう。冒頭にも書きましたが、このコンサートは三日間にわたって行われ、一日目がAプロ、二日目がBプロ、三日目がCプロとなっています。それぞれのプログラムには、実行委員、企画構成委員、そして司会がそれぞれ決まっています（もちろんすべてが作曲家の方々です）。毎日14人の作曲家が、自分の一番気に入っている（であろう）曲をひっそりと登場します。この演奏会の楽しく、有意義なところは、要するに作曲家が人前に登場し、演奏してしまふところ、がすいのです。作曲家の身分は文字通り曲をつくることで、普段あまり人前で指揮をしたり、伴奏したりなどということはないものです。若い世代の作曲家本誌連載の新美さんや青島さん達

七月九日(水)、十日(木)、十一日(金)の三日間にわたり、東京のパリオホールで「合唱の祭典」というイベントが開催されました。これは、日本作曲家協議会と東京合唱協会(要するに、作る側と歌う側)の共催で行われました。

最近の合唱界は、アマチュアを中心になかなかのブームになっています。スポーツとともに、文化面での「心の充実」をはかろうとする人達が、合唱団に入って歌でも歌ってみよう、と合唱をはじめたケースが増え、おのずと合唱団の数も増えてきました。また、小学校から高校、大学までの、学校内での合唱活動(部やサークル)も最近ますます盛んになり、いろいろなコンサートやコンクールを見ていると、その技術的なレベルの高さはたいへんなものです。

合唱団の数が増えて、レベルもあがっていると、当然、それらの合唱団が歌う曲も増えていなければなりません。もしかしたら実はその逆で、曲数がどんどん増えていったから、合唱団の数もそれにつれて増えていったのかもしれない。なんが、卵が先か、ニワトリが先か、みたいな話になってしまいました。要するに、雨後のタケノコのごとく合唱団が生まれてきた背景には、それらに曲を提供してきた作曲家の数も増えてきたのだ、という、いわば必然性もあつたのです。

今、たぶん三十歳代から上の人——中年と言われはじめているであろう人達——が高校生だった頃、日本の合唱